

豊田光世 著

『p4c の授業デザイン  
共に考える探究と対話の  
時間のつくり方』

明治図書出版、2020 年  
176 頁、2,100 円（税別）

学校を、子どもたちと一緒に考え、探究する場所へと変える。この本には、子どもたちとの対話「p4c=philosophy for children 子どもの哲学」に取り組むための心構え、ミニゲームやツール、教室のつくり方、具体的な授業案、対話のための秘訣といったすべてが、豊田さんの願いとともに綴られています。とりわけ感動的であるのは、ハワイ大学のトーマス・ジャクソン教授から p4c を学ばれた豊田さんが、具体的な p4c の授業の土台となる考え方を Part2 の中で説明され、Part3 ではハワイの学校で行われている p4c の歴史や背景を生き生きと描かれていることにあります。私たち読み手は、しばしば単なる理想郷として描かれがちであるハワイという場所に、無数の努力や工夫があることを、きっと知ることになります。

「もっと学校の中に、ゆっくりと考えることができる時間があればいいのに。もっと、いろんな人たちと話せる場所だったらいいのに。もっと、もっと。もっと私たちがお互いに優しくなれたら。学校はもっといい場所のはずなのに」。豊田さんに導かれて p4c Hawai'i の素晴らしさに出会った私も、様々な願いを込めて、子どもたちと日々対話して

います。それでも。

教師と子どもの間には、立場の違いだけでなく、ヒエラルキーが存在しています (p. 109)。

それでもやはり「教師と子ども」の間には身分の違いだけでなく、力関係があります。取り換えのきく「教師」として学校の中で働く私たちには、なかなかそのことを振り返る機会はありません。私がいなくなっても、とくに困ることなく動いていく学校という大きな組織の中では、力関係が、教壇のこちら側と、あちら側を「うまく」働かせることとなります。でも、そのシステムこそが、私たちの自然な対話を邪魔するものでもあるのです。対話の中にヒエラルキーが持ち込まれるとき、私はいつもへこたれます。対話がうまくいかないときに、へこたれる。でも、私だけがうまくいっていったとして、同僚の「教師」がうまく対話できずに「なぜあなただけできるんだ」と言われたときに、またもや、へこたれることとなります。だから。

教師こそが、セーフコミュニティを必要としているのです (p. 163)。

この言葉から、そして、豊田さんが育ててきたセーフコミュニティの取り組みから、私たちは多くを学ぶべきなのだし、すべての仲間たちへの敬意という p4c Hawai'i に込められた願いを実現できるように努力していくべきなのです。

この本には、子どもたちの率直な感想もたくさん掲載されています。仙台市立西中田小学校の理科「環境」の授業で行われた「このままにしたら地球はどうなるのか」という p4c に参加した小学6

年生の言葉が、とりわけ私の印象に残りました。

特に思ったことは、人とは違う、他の人から見たら悪い意見だったとしても、一人ひとりが発言すべきなんだということを考えました。そして、同じ意見の人がたくさんいたけど、誰一人として、全く同じ意見ではなかったことに驚きました (p. 162)。

なるほど、なるほど。悪い意見。この言葉を豊田さんは、こんな風に受け止めています。「この子どもが『悪い意見』という言葉で示しているのは、おそらく他の人が『賛同できない意見』でしょう。たとえ賛同してもらえなかったとしても、自分が気づいたことを提示していくことで、その場にいた人の考えが揺さぶられ、深まっていくということが語られています。」(p.162)。まったくその通り。悪い意見は、普段の生活では単なる悪いものとして、見捨てられ、黙殺されていきます。でも、見捨てたり、黙殺したりすることこそが、対話を締め出すような「悪い」ことなのではないでしょうか。この本を読みながら、あらためて私は「悪い意見」と対話できる場所を夢見るようになりました。そういえば、トーマス・ジャクソン教授のハワイ大学での授業に参加させてもらった折、ある学生さんが「宿題を忘れたって言ったのに感謝されたのは、この授業が初めてだよ」と嬉しそうに話していたことを、なぜだか思い出してしまいました。

中川雅道 (神戸大学附属中等教育学校)